

ガレノスと古代ギリシア・ローマ医学史研究の現在

——ガレノス『解剖学論集』の刊行によせて——

今井 正浩

弘前大学人文学部 西洋古典学研究室

はじめに

西洋古典古代の代表的医学者の一人ガレノス(129-c.210)の解剖学関係の小論考6篇(「骨について初心者のために」「静脈と動脈の解剖について」「神経の解剖について」「嗅覚器について」「子宮の解剖について」「筋の解剖について初心者のために」)をおさめた『ガレノス解剖学論集』(坂井建雄, 池田黎太郎, 澤井直訳)と題する翻訳書が, 2011年12月に京都大学学術出版会より刊行された。訳者の一人である坂井建雄氏は, 人体解剖学の分野において, わが国を代表する専門研究者の一人である。人体の構造と機能に関する坂井氏の卓越した専門知識, 西洋古典学の分野において, 長年にわたって研究をつみかさねてこられた池田氏の古代ギリシア・ローマ文化に対する深い洞察, 医学史家としての澤井氏の研究実績が見事に融合した結果としての, 古典ギリシア語の原典にもとづく学術的な翻訳書の刊行である。

京都大学学術出版会の西洋古典叢書におさめられているガレノスの著作の翻訳は, この翻訳書の刊行によって, 『自然の機能について』(種山恭子訳, 1998年刊), 『ヒポクラテスとプラトンの学説1』(内山勝利・木原志乃訳, 2005年刊)につづいて, 三冊目ということになり, その学術的な意義はきわめて大きいと評することができる。小論では, この『解剖学論集』の書評をかねて, ガレノスの医学を中心に, 古代ギリシア・ローマ医学史研究の欧米の最近の動向を紹介しながら, 本書におさめられた諸論考を含む解剖学関係の論考・著作が, ガレノスの思想の展開において持つ

意味について述べてみたい。

ガレノスと欧米における古代ギリシア・ローマ医学史研究の最近の動向

2005年7月, ガレノスの医学思想を主要なテーマとする国際研究集会が, イギリスのエクセター大学において開催された。主催者は, エクセター大学の西洋古典学・西洋古代史学科のクリストファー・ギル教授(Christopher Gill), ジョン・ウィルキンス教授(John Wilkins), 現在は, オックスフォード大学で古典ギリシア語の講師を勤めているティム・ホイットマーシュ博士(Tim Whitmarsh)の三氏である。ロンドンを中心にイギリス各地で発生したテロ騒ぎの影響も懸念されたが, イギリス国内をはじめ, ドイツ, フランス, オランダ, イタリア, アメリカ合衆国などの欧米諸国からの参加者を中心に, 世界中から総勢50余名の研究者たちが参加した。全四日間の日程で, 質疑応答をも含めて90分にわたる口頭発表が12題という非常に過密なタイム・スケジュールのもと, 多様なトピックにもとづく刺激的な話題提供と活発な質疑応答が交わされた。発表者の中には, 長年にわたって欧米圏のヒポクラテス研究を主導してきたパリ第IV大学のジャック・ジュアンナ教授(Jacques Jouanna), 西洋古典古代の科学史研究の第一人者として名高い, ケンブリッジ大学のジェフリー・ロイド教授(Sir Geoffrey Lloyd)などが名を連ねていた。

この国際研究集会の成果については, 開催から4年後の2009年にChristopher Gill, Tim Whitmarsh and John Wilkins (edd.), *Galen and the World of Knowledge*

(Cambridge UP, 2009)と題する研究論集が、ケンブリッジ大学出版より刊行されているので、ご参照いただきたい。なぜなら、この論集は、ガレノスの医学をはじめとする古代ギリシア・ローマ医学史研究の先進国にあたる欧米の最近の研究動向について知るうえで、きわめて重要な示唆を与えているからである。ガレノスは、ヒポクラテス(c.460-370 BC)とならんで西洋医学史に登場するビッグ・ネームの一人であり、第二次大戦以前、おもにドイツ語圏を中心とする専門研究者たちの関心は、もっぱら、この人物の医学者としての業績とそれが後世に与えた影響について、学術的評価を下すという点にむけられていた。これに対して、最近の研究においては、ガレノスの学問的業績を医学史的評価にとどめるのではなく、むしろ、より広く思想文化史的な観点に立って、紀元2世紀のローマという時代を生きた思想家の一人として位置づけたうえで、その全体像を再評価するという方向へと動いているように思われる。以上のことは、西洋医学が、ヨーロッパという文化圏における貴重な文化的所産の一つとして成立してきたという歴史のプロセスを考え合わせれば、むしろ当然のことであると言えるだろう。

ガレノスの解剖学関係の 論考・著作について

ガレノスの解剖学関係の論考・著作は、今回刊行された『解剖学論集』におさめられた6篇の小論考を含めて多数伝えられているが、その中でも『人体の諸部分の用途について』(全17巻)や『解剖の手引き』(全15巻)などを、その代表的なものとしてあげることができる。『人体の諸部分の用途について』は、その表題からもわかるように、アリストテレス(384-322 BC)の『動物の諸部分について』と題する論考(全4巻)を明らかに意識して書かれたものである。アリストテレスは、動物体の諸部分・諸器官には、所定の目的を実現するための働きが存在すると考えた。以上の考え方は「自然(ピュシス)がなすことには、すべて目的がある」とする同書・第1巻・第1章の一節(641b12)に端的に示されている。ガレノスもま

た、アリストテレスの目的論(teleology)の立場を基本的に踏襲しながら、医学者としての解剖学的知見にもとづいて、人体を構成する諸部分・諸器官の構造と機能をより一層厳密に説明しようとしたのである。

これらの著作が、人体を構成する諸部分・諸器官を、全体にわたって系統的に把握することを意図しているのに対して、この『解剖学論集』におさめられている6篇の小論考(「骨について初心者のために」「静脈と動脈の解剖について」「神経の解剖について」「嗅覚器について」「子宮の解剖について」「筋の解剖について初心者のために」)は、人体の特定組織や器官の構造と働きを説明することに重点がおかれている。

「骨について初心者のために」と題する論考(序文+全25章)は、ガレノスの解剖学関係の論考・著作の中では、比較的初期のものに属しており、ガレノスがはじめてローマにおもむき、そこに数年間滞在した期間中(162~166)に執筆されたものであるとされている。序文において、身体各部分の骨どうしの結合の種類と形状を、専門用語をもとに、全般的に解説したあと、頭部と顔面からはじまって、背骨、胸骨と肋骨、肩甲骨と鎖骨、腕と手の骨、坐骨、脚部と足の骨という順に、各部分の骨の構造と働きについて具体的な説明を与えている。

「静脈と動脈の解剖について」と題する論考(全10章)および「神経の解剖について」と題する論考(全17章)は、ガレノス自身がこれらの論考の中でことわっているように、かれが二度目のローマ滞在期間中(169~)に執筆したとされている『解剖の手引き』(全15巻)中の血管系・神経系に関する論述部分を、初学者むけの概論として書きあらためたものである。「静脈と動脈の解剖について」では、肝臓と腹部の臓器をつないでいる門脈とその枝脈、肝臓を中心として上半身と下半身に広がる静脈とその枝脈、さらに心臓から生じる大動脈を起点として全身に分布している動脈群という順で、血管系に関する系統的な説明を与えている。「神経の解剖について」では、全身にわたる末梢神経の分布を、脳自体から発してい

る七対の脳神経系と脊髄から発している脊髄神経系にそれぞれ分けて、詳細にわたって記述している。

「嗅覚器について」と題する論考（全6章）は、嗅覚という特定の感覚とそれに固有の器官の位置と構造を、鼻と周辺部分の解剖学的知見をもとに明らかにしようとしたものである。この論考において、ガレノスは、アリストテレスが『魂について』や自然学小論集の中の『感覚と感覚されるものについて』と題する論考で提示している説を批判しているが、その一方で「自然（ピュシス）は……制作した」などといった、アリストテレスの常套表現を多用していることから、アリストテレスの目的論の影響が顕著である。

「子宮の解剖について」と題する論考（全10章）は、6篇中でもっとも初期のもので、女性に特有の子宮の位置や構造などについて、ヒポクラテス、ディオクレス（c.350 BC）、プラクサゴラス、ヘロピロス（c.330–250 BC）など、ガレノス以前の医学者の諸見解に論及しながら、自らの解剖学的知見にもとづいて説明を与えたものである。

「筋の解剖について初心者のために」と題する論考（全37章）は、身体各部の筋組織の構造と働きについて、顔面からはじまって、肩と頸部、腕・肘・手、胸部、背中、腹部から下腿という順に、個別に詳細な説明を与えたものである。マリノス（c.130）、さらにガレノス自身が師事したとされるペロプスなど、かれの世代にいたる以前の医学者たちの解剖学的知見を批判的に検証しながら、身体各部の筋組織の構造と働きをわかりやすく説明している。論の冒頭には、この小論考と内容的に密接に関連するものとして『筋肉の運動について』と題する別の論考への言及がみえる。

以上が、これら6篇の小論考の大まかな内容である。ガレノスの解剖学関係の論考・著作の特長の一つは、論述が豊富で、詳細にわたること、その内容がきわめて正確であるという点にある。そのような観点に立った厳密な医学史的評価に関しては、わたくし自身は解剖学が専門ではないので、その方面の専門家の方にゆだねることにしたい。以下では、以上のような解剖学関係の論考・

著作がガレノスの思想の展開において持つ意義について、その一端を明らかにすることによって、小論をしめくりたい。

むすびにかえて

——思想家としての医学者ガレノス

ガレノスは、西洋医学における代表的な医学者の一人として医学史に登場するが、かれの学問的な関心領域はきわめて幅広く、解剖学・生理学・病理学をはじめとする医学の各部門にとどまらず、論理学・哲学・文献学（ヒポクラテス医学文書の注釈書の執筆など）にまでおよんでいる。

若いころ、ガレノスは、プラトン学派、アリストテレスのペリパトス学派、ストア学派およびエピクロス学派のそれぞれの哲学者たちに師事し、各学派の哲学を熱心に研究したとされている。アリストテレス哲学からの影響については、その一端を『解剖学論集』におさめられている小論考の中にすでに指摘した。もっとも、ガレノス自身は、医学の方面においては自らをヒポクラテスの正統的な後継者であるとみなす一方で、哲学に関しては、プラトン（427–347 BC）の支持者であるということを明確に表明している。

ガレノスは、その主著『ヒポクラテスとプラトンの学説』（全9巻）において、人間の魂の主導的部分がどこに座をしめるかという問い、すなわち、身体の中枢器官をめぐる長年の論争に関連して、アリストテレス、さらにストア学派の哲学者クリュシッポス（c.280–206 BC）の心臓中心説に対して、きびしい批判を展開している。ガレノス自身は、ヒポクラテスの脳中心説、プラトンの提唱する魂の三部分説——プラトンによれば、魂の理性的部分は頭部に座をしめるとされている——にしたがって、身体の中枢器官は心臓ではなく、脳であるという立場に立っている。このように、アリストテレスおよびストア学派の心臓中心説に対して、自らが支持する脳中心説の正しさを主張する場合に、その論拠として、ガレノスは、この『解剖学論集』におさめられた「神経の解剖について」と題する小論考をはじめとして、『人体の諸部分の用途について』や『解剖の手引き』

などの解剖学関係の論考・著作に随所で言及している。以上のことは、ガレノスが、医学者たちや哲学者たちの間で、長年にわたってホットな論争の的となってきた、身体の中樞器官をめぐる問題の解決のために、自らの解剖学的知見を役立てようとしていたという事実を明らかにしているのである。

この事実は、ガレノスの医学にかぎらず、古代ギリシア・ローマ医学史の研究において、一つの重要なヒントを与えているように思われる。わたしたちは、古代医学史や古代哲学史といった表現を、そうした歴史的文脈があたかも確定的なものとして存在していたかのように用いることが多いけれども、現実には、ガレノスが生きた時代の医学と哲学との間の相互関係は、わたしたちが想像

する以上に深甚であったということである。このような理解は、ガレノスの学問的業績を医学史的評価にとどめるのではなく、むしろ、広く思想文化史的な観点に立って、この人物の思想家としての全体像を再評価するという、欧米のガレノスの医学の研究の最近の動向に正当な理由づけを与えている。

だが、そうであったとしても、古典ギリシア語の原典にもとづく、この医学者の論考や著作の精読と分析が研究の出発点をなすということには、何ら変わりがない。この『解剖学論集』の刊行が、より一層グローバルな視点に立った、わが国の古代ギリシア・ローマ医学史研究の今後の進展に大きく寄与することを願ってやまない。